

品質評価手法研究部会

聴竹居から学ぶ 日本ならではの ファシリティ品質

部会長 **野瀬 かおり**

のせ かおり

ファシリティマネジメント総合研究所 代表
認定ファシリティマネジャー



ファシリティの品質を考えると大切になりたいのは、そのファシリティの「利用者」の視点である。当部会では品質評価に7つの軸 — 安全性・信頼性、快適性・機能性、耐用性・保全性、環境保全性、社会性・品格性、多様性、心理配慮性 — があると考えている。どの軸の具体的な評価項目も、ファシリティを利用する人の心理や生理を抜きにしては語るができない。

さて、昨今のワークプレイスに目をやると、コロナ禍を経てテレワーク環境が充実し、働く人が働く場所を選びやすくなった。一方で、テレワーク頻度が高い社員は孤独感が高くなる傾向にあることが指摘されている*。また、什器や照明などの作業環境は適切なのか、休憩はとれているか、運動はできているかなど、心身の健康への配慮は、企業にとって重要な課題のひとつである**。

ファシリティは人間の心理・生理に影響するという考え方のもと、日本人に適したファシリティを調べる中で、京都府大山崎にある聴竹居と出会った。建築家藤井厚二が1928年に建てた自邸、聴竹居は、日本の気候風土と日本人の感性や生活習慣に合わせて作られ、日本の住宅の理想型と言われている。

その工夫の一端を紹介する。まず、耐震性を高めるため平家とし、軽い屋根材を採用。また、地震の補強材

を兼ねて部屋の隅部に作り付けた家具や収納は、家具転倒のない安心感がある（安全性・信頼性）。日本の蒸し暑い夏を凌ぐため、深い軒の出や土壁といった従来の日本家屋の特色のほかに、土に埋めた土管を通して地中冷熱を屋内に取り込むクールチューブや、網代天井や平面計画により縦横方向の通風を確保する工夫が見られる（快適性・機能性、環境保全性）。クールチューブに耐久性の高い土管を使用し、定期的に保守点検を行ってきたため、90年以上経てもなお健在である（耐用性・保全性）。一段高くなった和室の床は、洋間で椅子に座った人と目線を合わせるための工夫であり、正座しやすいよう工夫された椅子は、和室活に慣れた住人への配慮である（心理配慮性、多様性）。また、天井の高さや空間の広さは大変心地よい大きさになっている（心理配慮性、快適性・機能性）。特筆すべきは、近隣住民から愛されるファシリティであることだ。聴竹居は住宅街の中に建てられた国の重要文化財であり、多くの人が見学に訪れる。近隣住民がガイドとなって自らのことばでその素晴らしさを語り伝えている姿は、社会性・品格性そのものである。◀

*：『JFMA ジャーナル 201 号』

宮中大介，慶應義塾大学特任助教・株式会社ベターオプションズ代表取締役

**：『JFMA ジャーナル 201 号』

松田文子，公益財団法人大原記念労働科学研究所 特別研究員



写真1 縁側のコーナー補強材を兼ねた棚



写真2 正座ができる椅子